

「見る」を含む学習の系統性（1）

－漢字教材を中心に－

坂東 智子

Systematicity of Learning Including “Seeing”(1) : Mainly in Kanji Teaching Materials

BANDO Tomoko

(Received September 28, 2018)

1. はじめに

これまでに、国語科における「見ること」の重要性については、多くの指摘がなされている¹⁾。石田(2011)²⁾は、浜本(2004) 藤森(2004) 奥泉(2006)らの議論を踏まえた上で、これまで「見ること」は「読むこと」のアナロジーで捉えられ、メディア・リテラシー教育との関係で議論されることが多いと述べ、「見ること」と「見る」を区別して次のように定義している。

- 「見ること」・「見る」経験を言葉によって表現すること。
- 「見る」・「非言語テキストを対象」とし「言葉にならない状態・言葉になる以前の状態」のこと。

石田は国語科においては「言葉にならない状態・言葉以前の状態から言葉を紡ぎだすことによって生成される学び」つまり「見ること」の学びが重要だとの認識を有している。

それに対して本研究では国語科における「見ること」ではなく「見る」活動、「見る」経験そのものに着目した研究を志向している。

その前提となる考えとして、言語哲学者のヘルダー(1744-1803)が『言語起源論』(1772)で提示した命題「われわれは一つの思考する共通感覚器官である」³⁾がある。ヘルダーの基本的な立場は、「感覚と思考とを統合する一つの全体として人間を捉えようとする」ところにあるとカッシーラーはいう⁴⁾。ヘルダーは、その著作において、聴覚や視覚等の「感覚器官」と人間の発達、言語形成の関係について言及し次のように述べている⁵⁾。

人間性の発達への道はよりよく、そして唯一である。すべての感覚器官は一緒に作用するので、われわれは聴覚によって、いわばいつも自然の学校において、抽象することと同時に話すことを学んでいる。

視覚は理性とともに洗練され、理性は命名の賜である。人間がこうして目に見える現象の最も繊細な特徴を分析しうようになったとき、言語とこれに類似したもののかに多くの蓄えができ上がっていることだろうか。かれが触覚から繊細な感覚器官へ行くさいに経由したのは言語の感覚器官にほかならず、こうしてかれは、感ずるものと同様、見るものをも音声にすることを学んだのである。

筆者は、ヘルダーの感覚器官と言語形成の関係についての考えを、「視覚の洗練は、理性の洗練に伴うものであり、理性は命名つまり言語とこれに類似したものの貯えによって洗練されるものである」と捉え、視覚の洗練と言語形成のプロセスは表裏一体のものと考えられると解釈している。筆者が国語科における「見ること」以前の「見る」を含む学習に着目する所以はここにもある。

そこで、本研究ではまず、先行研究⁶⁾の知見と、筆者のこれまでの古典の授業に源氏絵や絵巻を取り入れた授業の開発に関する研究⁷⁾を手掛かりとして、「見る」発達の系統性を考える観点の抽出を試みる。次に、小中学校の国語教科書における漢字学習教材から、「見る」に関するものを取り出し整理する。

2. 研究対象とする「視覚テキスト」

これまで国語科において研究対象とされる「視覚テキスト」の多くは、構成され創り出されたものであった。それらは「動的な映像」と「静的な映像」に大別されるが、いずれも制作者が意図をもって創り出したテキストであったといえよう。筆者も、これまで古典の授業に源氏絵や竹取物語絵巻等の絵画テキストを取り入れた授業開発を行ってきた。それに対して本研究では、学習者が視覚を通して感知する全てのものを「視覚テキスト」とする。次の表1は、「見る」対象となる「視覚テキスト」の種類と意味構成レベルについて整理したものである。

表1 「見る」対象となる「視覚テキスト」の種類と意味構成レベル⁸⁾

数量	種類	テキスト内容	構成意図
単独 複数 ひとまとまりの	静止画的 動画 事物 人物 自然や風景	具象的 象徴的 記号的 象徴的 複合的	構成意図をもたない 簡単な構成意図をもつ 複雑な構成意図をもつ

3. 「見る」の発達の系統性を考える観点の抽出—先行研究の知見の整理—

3. 1 「見る」の辞書的な意味

「見る」とはどのような行為か。辞書的な意味を整理する。ここでは二つの辞書『大辞泉』（第二版）⁹⁾、『日本国語大辞典』（第二版）¹⁰⁾の「見る」項に挙げられた意味を表2に整理した。

表2 「見る」の意味（『大辞泉』『日本国語大辞典』）

『大辞泉』	『日本国語大辞典』
<p>みる【見る、視る、観る】</p> <p>①目で事物の存在などをとらえる。視覚に入れる。眺める。</p> <p>②見物・見学する。</p> <p>③（「看る」とも書く）そのことに当たる。取り扱う。世話をする。</p> <p>④調べる。たしかめる。</p> <p>⑤（「試る」とも書く）こころみる。ためす。</p> <p>⑥観察し、判断する。また、うらなう。評価する。</p> <p>⑦（「診る」とも書く）診断する。</p> <p>⑧読んで知る。</p> <p>⑨身に受ける。経験する。</p> <p>⑩（ふつう、前の内容を「と」でくくったものを受けて）見当をつける。そのように考える。理解する。</p> <p>⑪夫婦になる。連れ添う。</p> <p>⑫（補助動詞）同士の連用形に「て」を添えた形につく。「てみる」「てみると」「てみたら」等。</p>	<p>みる【見・看・視・観・覧】</p> <p>一、目によって物の外見、内容などを知る。また、それをもとにして考えた判断したりする。</p> <p>①目にとめる。目で事物の存在を感じとる。</p> <p>②遠くに目をやる。ながめる。また、見物・鑑賞する。</p> <p>③目にとめてこれこれだと思ふ。物事をこうだと判断する。</p> <p>④占う。また、予知する。</p> <p>⑤悟り知る。わかる。</p> <p>⑥よく注意して調べる。観察する。また、診断したり鑑定したりする。</p> <p>⑦文字に表現されたことを知る。読む。</p> <p>二、物事を経験したり、物事や人に対して身をもって働きかけたりする。</p> <p>①経験する。ある物事を身に受ける。</p> <p>②人の気持ちや意志、物の質などがどうであるかをためす。</p> <p>③人と顔を合わせる。会う。④（③から転じて）男女の交わりをする。また、夫婦として暮らす。</p> <p>⑤世話をする。面倒をみる。⑥ある行為・作用が実現する。</p> <p>三、補助動詞として用いる。</p>

3. 2 鹿内信善『看図作文指導要領』

鹿内（2010）は、国語の学習指導に「みる」ことの指導を取り入れていく必要性を次のように説明する¹¹⁾。

「みる」ことは物事を認識するための強力な手段になります。このことは、はるか昔からわかってきたことなのです。こんな強い力を発揮する「みる」ことが国語教育では、ほとんど取り上げられてきませんでした。国語の学習指導で「内容」として取り上げられているのは、話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと、の4つだけです。国語が、物事を認識する力を育てる教科のひとつであるとしたら「みる」ことの指導も取り入れていく必要があるのではないのでしょうか。実際に欧米や中国等では、国語の授業の中にさまざまな形で「みる」ことの指導が取り入れられています。

鹿内は「見ること」ではなく「みる」と表記している。鹿内は中国で広く行われている作文指導法である絵図を「看」ながら作文を書いていく看図作文指導法を参考にしながら、日本の作文教育でも活用できる絵図の開発を行い「新しい」看図作文指導要領を提案している。ただし、中国で用いられている絵図をそのまま用いることが難しい理由を鹿内は次のように述べている¹²⁾。

中国の看図作文で用いられている絵図には独特のテイストがあります。また文化的背景も日本と違ってきます。いくつかの理由から、中国で用いられている絵図を日本でそのまま用いることはできません。

イラスト、絵図であっても、そこにはその国の「独特のテイスト」があり「文化的背景」を背負っているというのである。ここにも、「見る」、「視覚」の洗練に至る系統性を考えるヒントが示されている。

具体的には、「絵図の読み解きに必要な活動」は「変換」「要素関連づけ」「外挿」の3つである。それらは次のように定義される¹³⁾。

(1) 変換 テキスト中で記述されている概念や内容を別のことばに言い換えたり、ある種の記号表示法を他の表示法に変えたりする活動である。

(2) 要素関連づけ テキストを構成している諸要素

を相互に関連づける活動である。

(3) 外挿 テキスト中で記述されている内容を超えて、結果について推測したり発展的に考えたりする活動である。

鹿内自身も述べていることであるが、中国における「看图作文」は伝統がある反面、体系化が遅れている。加えて、最終的な目標を、ブルームB.Sの「外挿(extrapolation)」にさだめているため、見たことを発展させて独自の観点から文章を書かせることに重きが置かれているという指摘もある¹⁴⁾。これは「みる」ことそのものの力をつけることを最終的な目標としていないということであろう。「見る」力をどう育てるかという視座に立った場合、最終的な目標設定をどのように設定すればよいのかは、慎重に検討していかなければならない。

3. 3 現行教科書で必要とされている静的映像教材を「読み解く力」（奥泉香ら）

奥泉香ら（2004）は、光村図書出版、教育出版の2社から出版されている小学校国語科教科書を中心に、それらの中で扱われている絵や写真等の読み解きに必要な力の検討を行った¹⁵⁾。

抽出し検討された単元数は1年から6年まで、2社で、絵や写真、絵地図等を扱っている33単元である。これらの単元を、①表現されている対象、②対象の何を見ることによって、③どのような言語表現をさせようとしているのかの三要素から検討し14の型に分類・整理した上で、さらに8種類の映像教材を「読み解く力」に大きく分類している¹⁶⁾。次の表3では、奥泉らが整理した「読み解く力」を左列に記し、そこから筆者が抽出した「見る」力に関係するキーワードを右列に記した。

表3 絵や写真を「読み解く力」と「見る」力に関係するキーワード

現行小学校国語科教科書の検討から整理・分類された絵や写真を「読み解く力」（奥泉香ら）	「見る」力に関係するキーワード（坂東）
ア；絵や写真からわかることを正確に「読み解く力」（だれが何をしているか、何はどのような形状か、だれはどこにいるか等） イ；絵や写真をきっかけとして、自分の経験や知っていることを述べる力 ウ；絵や写真を比較する力 エ；絵や写真から想像してお話等を作る力 オ；絵や写真ではわからない情報を、聞いたり調べたりして補う力 カ；複数の絵や写真の関係を検討して、つなげて説明やお話を作る力 キ；絵や写真に込められた象徴性やメッセージ性などをことばにしてみる力 ク；絵や図、写真の効果を考えて、情報を発信する力	<ul style="list-style-type: none"> ・事物を捉え認識する ・注意深く見る ・外見から内容を知る ・構成要素や内容を言葉に変換する ・自分の経験や知っていることと関連づける ・比較する ・想像する ・調べ確かめる ・象徴性、メッセージ性に気づく ・象徴性、メッセージ性を言語化する ・表現効果を吟味・評価する ・情報を発信する

3. 4 西オーストラリア州「見ること（Viewing）」の学習領域構造（奥泉香ら）

奥泉ら（2004）は、メディア教育の先進地であるオーストラリア連邦・西オーストラリア州（以下WA州と称す）の英語科（第1言語としての）のカリキュラム構造と内容を詳しくみることにより、英語科の中でも特にその中に位置づけられている「見ること（Viewing）」領域に焦点を当て、その構造や内容、系統性を明らかにしている¹⁷⁾。奥泉が対象としたのは「Education Department of Western Australia (1998)」である。WA州のカリキュラム全体の特徴について本研究と関係が深い次の2点を引用する¹⁸⁾。

どの学年で何を教えるか（学ぶか）という対応関係では書かれていない。そのかわり、レベルFおよび、1～8までのレベルについて、どのような到達

度（Outcome）に達していればそのレベルと判定できるかの規準が書かれている。規準は学年に対応させず、個々の学習者ごとのちがいを見取る目的で活用されている。

わが国では教科ごとに縦割りで学習指導要領が作成されているが、WA州のカリキュラムフレームワークでは、先に、13項目からなる「教科を超えた共通の教育目標（The Overarching Statement）」が定められ、これに準拠させて各教科の教科内容が策定されている。そのため、教科ごとの接点作りやすく、教科の壁を取り払った相關カリキュラムとしての運用が容易である。（中略）13項目の内の1項目を例として紹介しておこう。「学習者は、どのような時にどのような情報が必要かが認識でき、さまざまな発信源から情報を探し出したり、手に入

れたりすることができ、他者と共に活用したり共有したりできる。」

カリキュラムフレームワークで定められた教科のうち、メディア教育を中心的に担うのは、英語、アート、技術とその応用である。奥泉（2004）をもとに、英語科の4つの主要素（Strands）と下位要素4を表4として整理する¹⁹⁾。

表4 WA州英語(English)の主要素と下位要素(1998)

主要素	下位要素
<ul style="list-style-type: none"> ・話すこと・聞くこと (speaking and listening) ・見ること (viewing) ・読むこと (reading) ・書くこと (writing) 	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストの活用 (Uses of Text) ・文脈の理解 (Contextual Understanding) ・表現・理解におけるきまり (Conventions) ・課程と方略 (Processes and Strategies)

WA州英語科は上記の領域と下位要素の組み合わせに

より16の学習内容で構成される。また、英語科が「学習の対象とするMedia」は「印刷物、ラジオ、テレビ、ビデオ、映画、双方向的なマルチメディア、インターネット」であると明確に記述されている。

次に「見ること」のレベルF・1～8の大目標²⁰⁾を奥泉（2004）から表5の左列に転記し、表3と同様にそこから発表者が抽出した「見る」力に関係すると考えられるキーワードを右列に記すこととする。

その前に、F・1～8レベルの大目標を大きく分けた三段階の想定を述べておきたい。

- ①視覚テキストを注意深く見て、学習者の経験と関連づけたり、簡単な解釈を述べたりする段階。
- ②テキストが作られているものであることを前提に、それらを具体的に分析する技術 (Viewing Skills) を使って、さまざまな分析ができるようになる段階。
- ③学習したテキストを越えて、学習者をとりまく様々な視覚的テキストを、社会・文化的価値との関係で分析、批評できる段階。

表5 WA州「見ること」のレベルF・1～8の大目標と「見る」力に関係するキーワード

WA州「見ること」のレベルF・1～8の大目標 (1998)	「見る」力に関係するキーワード (坂東)
VF 視覚的テキストを注意深く見て、そこに描かれている共通に確認し合える構成要素を認識し、それらをもとに内容につながるような方略を使うことができる。そして、これらの活動が行われていることがわかるような反応を示すことができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・注意深く見る ・共通に確認し合える構成要素を認識する ・構成要素から内容を捉える ・上記の活動がわかるような反応をする
V1 視覚的テキストを見て、そこに表現されていることを言語化したり、簡単な解釈をしたりすることができる。そして、しばしば、それらと自分の経験とを関連づけることができる。視覚的テキストの中から手がかりを使って、その意味を予想することができる。さらに、象徴や、社会・芸術上の約束事を利用して、気づいたことを発表することができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・表現されていることを言語化する ・簡単な解釈をする ・自分の経験と関連づける ・意味を予想することができる ・象徴や、社会・芸術上の約束事を利用して気づきを発表できる
V2 なじみのある視覚的テキストを分類したり、それらについて議論したりすることができる。それらのテキストが、ある人の、実際、あるいは想像上の体験にもとづいて作られているということを理解できる。共通に見ているテキストに、何らかの目立った特徴を見つけたり、何らかの象徴的な意味を解釈したりすることができる。そして、なじみのあるテキストについてのこれらの知識を、新たなテキストの意味を読み解く際に用いることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・分類する ・議論する ・創られたものであることを理解する ・特徴を見つける ・象徴的な意味を解釈する ・テキストを読み解く既得知識を新しいテキストの読み解きに用いる
V3 視覚的テキストの内容やその目的が、そのテキストの形式を規定する方法について、吟味したり議論したりすることができる。そして、簡単な象徴的表彰やステレオタイプを認定したり、解釈したりすることができる。特定のコードや約束事が、受け手の理解を形作る働きをすることを認識する。なじみのある視覚的テキストを解釈するために、いろいろな方略を結びつけることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・内容、目的と形式の関係を吟味、議論する ・象徴的表彰やステレオタイプを認定したり解釈したりする ・受け手の理解を形成するコードや約束事の働きを認識する ・解釈の方略を複数結びつけることができる
V4 ひとまとまりの視覚的テキストの特徴についての知識を、テキストの意味を理解するのに用いることができる。視覚テキストのコードや約束事が、受け手の解釈を形作っていく仕組みを認定することができる。そして、見る目的の違いに応じた方略を選んだり使ったりし、そのことを振り返って考えることができる。	<ul style="list-style-type: none"> ・特徴についての知識を意味理解に用いる ・受手の解釈はコードや約束事により形成されているという仕組みを認定する ・見る目的に応じて方略を選び使う ・選び使った方略について振り返って考える

<p>V5 テキストの様々な解釈に対して、考え得る根拠を説明することができる。物語の構造といった知識を、そのテキストの発想や表現に対する自分なりの理解に適用することができる。そして、文脈やテキストの形式、コードや約束事といった知識を適用して、その視覚的テキストが、ある特定の見え方で見えるようにするためには、どのように構成されているかをふり返って、吟味することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・解釈の根拠を説明することができる ・別の文脈で得た知識を視覚的テキストの理解に適用する ・テキスト構成を既得知識をもとに吟味する
<p>V6 テキストの複合的な発信形態において、遠近法などの幾つかの観点を探究することができる。そして、それらの観点を、自分なりの世界の理解に結びつけることができる。テキストが作られた（社会・文化的な）文脈や、それらがどのようにテキスト中において反映されているかを検討することができる。視覚的テキストの特徴を比較して、目立った類似点や相違点を検討することができる。さらに、より広範な興味を誘発するテキストを見た時に自分が知っているあらゆる方略の中から、そのテキストの理解を支える方略を利用することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・複合的なテキスト理解ができる ・遠近法等の観点を探究する ・観点を世界理解に結びつける ・社会・文化的な文脈がテキストに反映されているか検討する ・特徴を比較する ・類似点・相違点を検討する ・テキスト理解を支える方略を既知方略の中から選び利用する
<p>V7 複雑に構成されたひとまとまりの視覚的テキストから、その意味するところを構築したり、その根拠を挙げたりすることができる。テキストとそれが作られた文脈、受け手、発信者との相互関係を考えることができる。また、見るための観点がどう構成されているかを批評することができる。そして、テキストを見る際に用いられる方略を、批判的（クリティカル）に評価することができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとまとまりの視覚テキストを対象とし、意味を構築したり根拠を挙げたりできる ・作成された文脈、受手と発信者の相互関係を考える ・観点の構成を批評する ・方略を批判的に評価する
<p>V8 より広範にわたる視覚的テキストを分析したり、批評したりできる。この種の視覚的テキストには、視覚的にも構造的にも、かなり難しいテキストも含まれる。そのような視覚的テキストによって投影されたり、反映されたりして表現されている社会・文化的価値、態度、その中で前提とされていることがらを分析できる。そして、それらによって受け手の立場や解釈が、どう形作られていくのかも分析できる。視覚的テキストについての詳細な批判的評価を手助けするような、見ることの方略を選んで使うことができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・間接的に表現されている社会・文化的価値、前提とされていることがらを分析できる ・上のことが、受手の立場や解釈にどう影響を与えているか分析できる ・批判的評価を助ける見ることの方略を選んで使う

4. 「見る」の発達の系統性を考えるキーワード 「見る」発達の系統性を考えるための要素の整理を試み、先行研究の知見とこれまでの筆者の研究をもとに、「見る」と「見ること」レベル試案を提案する。

表7 「見る」と「見ること」レベル（試案）

レベル	認識	方略	思考	言語化
I	全体をおおまかに捉える	全体を見る（おおまかに、詳細に、近づいて、遠くから、俯瞰的に）	構成要素やその関係から場面や様子内容を考える	見えるものと言葉を対応させる
II	個々の構成要素を外見から明確に認識する	部分を見る（詳しく、分析的に）	解釈する（簡単な、象徴的な意味）	意味内容を構成し言語化する
III	構成要素の意味内容を認識する	部分と部分の関係を見る	象徴や社会・芸術上の約束事を利用して解釈する	象徴性、シンボルなどを理解し言語化する
IV	構成要素の関係を認識する	方略を知っている（比較、分類、類推、推測等）	他の情報を参照して解釈する	テキストの特徴や、内容、目的と形式の関係を吟味し議論する
V	全体の内容や特徴を捉える	ふさわしい方略を選ぶ	内容、目的と形式の関係を吟味評価する	解釈の根拠を説明する
VI	自分の経験や既知のものに関連付けて認識する	目的に合わせて方略を組み合わせて用い、それを吟味評価する	受手の解釈はコードや約束事により形成されているという仕組みについて考える	ひとまとまりの視覚テキストを対象とし、意味を構築したり、解釈の根拠を挙げたりして説明する

VII	社会文化的背景や因果関係を認識する	別の文脈で得た知識を視覚的テキストの理解に適用する	社会・文化的な文脈がテキストに反映されているか考える	社会・文化的な文脈がテキストに反映されているかについて議論する
VIII	時間軸や空間軸にテキストを位置づけ認識できる		作成された文脈、受け手と発信者との相互関係を考える	時間軸や空間軸にテキストを位置づけ論じる
IX	受手の理解を形成するコードや約束事の働きを認識する		間接的に表現されちる社会・文化的価値、前提とされていることがらを分析的に考える	

5. 「見る」に関する小中漢字教材（光村）の系統性について

小中国語教科書の漢字教材から、「見る」に関するものを取り出し、表6に整理した。対象とした教科書は、

小学校（光村図書H27版）、中学校（光村図書H28版）である。今回、光村図書を対象にした理由は、平成29年度山口大学教育学部附属小中学校で採択されているためである。

表8 「見る」に関する小中国語教科書の漢字教材の系統性（光村図書）

学年	教材名	学習内容	該当漢字	「見る」
小1下	かん字のはなし	姿形や様子から漢字ができたことを理解する	山水雨上下日本田川林森	姿形や様子と漢字を比べながら見る、記号性に気づく
小2下	なかまのことばとかん字	仲間の言葉と漢字と一緒に覚える	親子父兄弟母姉妹 赤青黄白黒茶 朝昼夜午前午後正午	分類、類別、関係性
小3上	へんとつくり	へんとつくりを理解する へんとつくりを組み合わせて漢字を作る	語詩調話板柱住係 油港	部分に分けて見る、組み合わせる、意味を理解する、象徴性、記号性に気づく
小4上	漢字の組み立て	部分を組み合わせる漢字を作る かんむり、あし、によう、たれ、かまえ	花葉葉家安筆箱雲雪悪 意感照熱遠近通府広店 凶園園門開開間	部分に分けて見る、組み合わせる、意味を理解する、象徴性、記号性に気づく
小5	漢字の成り立ち	漢字の歴史や成り立ちを理解する 象形文字、指示文字、会意文字、形成文字	馬上鳴草粉河銅館板週 際犬末明清	部分に分けて見る、組み合わせる、意味を理解する、象徴性、記号性に気づく、時間軸、知識
小6	漢字の形と音・意味	同じ部分をもつ漢字の形や音、意味のつながりを理解する	求球救化貨花静清晴青 則側測徒往復待後従脳 臟胃肺腸	部分に分けて見る、組み合わせる、意味を理解する、象徴性、記号性に気づく、時間軸、知識
中1	漢字1 漢字の組み立てと部首	漢字は二つの部分を組み立てたものが多いことを理解し、「へん、つくり、かんむり、あし、たれ、によう、かまえ」の部分は、その漢字のおおまかな意味を表すことを知る。（部首、漢和辞典の配列）	説調論休供使判利刻助 効動笛筆節今会余照熱 熱思悲意庁店庫疲病癱 追通遠起越超回固園開 間関	部分に分けて見る 部分を組み合わせる 類似点、相違点 分類、比較 記号性、象徴性、 構造、 部分の意味を知る 知識と結びつける
	漢字3 漢字の成り立ち	漢字の成り立ちには、象形・指示・会意・形声とよばれるものがあることを理解する 国字、漢字の作り方、漢字の分類「六書」、漢字の使い方、転注、仮借	畑峠月忠本河末武飯板 販署諸緒輸諭論河何苛 伯拍泊	

中2	漢字1 熟語の構成	二字熟語・三字熟語・四字熟語の主な構成を理解する。	思考規則縮小山岳搭乘 前後売買強弱禍福慶弔 国営雷鳴日照人造開会 造園遷都帰郷就職水路 熱心俊足猛犬逆流上中 下松竹梅初対面肖像画 無意味可能性花鳥風月 国際交流運転免許証一 進一退大同小異美辞麗 句	関係を見る 構成原理を見る
----	-----------	---------------------------	---	------------------

6. 「見る」を含む漢字学習の実践事例「かん字のはなし」（小1下）

本章では、「見る」を含む漢字学習の実践例を紹介する。この授業は、筆者の研究室ゼミ生（当時学部3年）が後期基本実習の査定授業で行ったものである。筆者は、その授業を参観しており、実習終了後に、授業の振り返りを他のゼミ生と一緒にいった。その後、当該ゼミ生は、漢字指導を卒論研究のテーマとすることとなった。授業者が作成した指導案をもとに、授業の概略を以下に示す。
単元 漢字を楽しく使おう「かん字のはなし」

授業者 生月千晴（山口大学教育学部3年国語教室坂東ゼミ）

授業日 平成29年10月10日（後期基本実習査定授業）

クラス 山口大学教育学部附属山口小学校1年2組

（1）単元設定の理由（割愛した部分がある）

○ 本単元は、漢字の成り立ちについて学習しながら、漢字のでき方の面白さに気付き、漢字そのものへの興味をもつことをねらいとしている。本単元での学習で使用する漢字の成り立ちの図解資料は、漢字が簡単な絵や印からできているということに気付かせ、漢字の身近さや奥深さを感じさせることができるのである。様々な漢字のもととなる絵と漢字を丁寧に比べながら学習を進めていく中で、子どもはそれぞれの漢字が意味をもつ表意文字であるということに気付き、正しい使い方で、楽しく文章の中でしようすることができると思う。

○ そこで、指導に当たっては、特に次の点に留意する。

- ・漢字が表意文字であることを意識することができるように、漢字とその漢字を表す絵を丁寧に結びつけながら全体で確認する。
- ・文章の中で漢字を使用する楽しさを感じることができるように、既習漢字をイメージしやすい絵から文章を作成するよう促す。
- ・漢字を正しく書くことができるように、漢字の形や筆順を友達同士で確認する時間を設ける。

（2）目標

- 漢字に対する興味関心をもち、漢字を正しく読み書きすることができるようにする。
- 絵をイメージしながら漢字を書いたり、漢字を使用して文章をつくったりする楽しさを味わうことができるようにする。

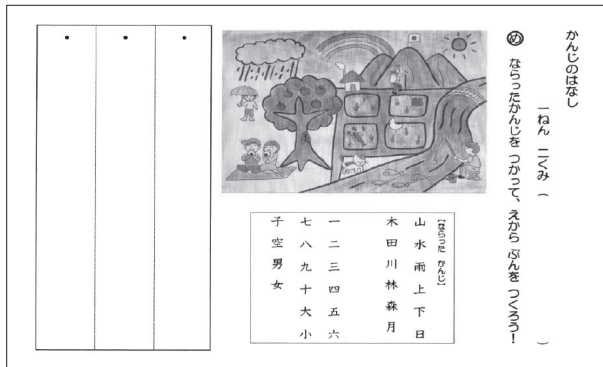
（3）指導計画（全3時間）

3. 漢字の成り立ちを知る……………（1）
4. 漢字の手紙を完成させる……………（1）
5. 漢字を使って文をつくる……（1）本時1/1

（4）本時の学習

- ・主眼 絵から文章をつくる活動を通して、文章の中で正しく漢字を使うことができるようにする。
- ・主な学習過程
 - （ア）本単元で学習した漢字を振り返る。
 - （イ）絵を見て、その内容を表す文をつくる。
 - （ウ）作った文や文章について、友達とかくにんし合い、発表する。
- ・授業の様子と使用したワークシート





8. おわりに

本研究では国語科における「見ること」ではなく「見る」活動、「見る」経験そのものに着目した。それは、教科横断的なカリキュラムを考えていく際に「見る」が国語科と他教科および学校行事、体験活動や地域との連携等を繋ぐキーワードのひとつになり得るとする筆者の仮説によるものであった。先行研究の知見をもとに、「見る」の発達、系統性を考えるキーワードの抽出と整理を試みたが、現段階では中途段階で、十分なものとはいえなかった。教科書分析については、漢字の学習における「見る」活動という新たな観点を見出した。

学年ごとの漢字教材の学習内容を「見る」という観点から捉え直すと、漢字学習を「見る」観点から系統化することが見えてきた。例えば、小学校1年生の「かん字のはなし」では、「姿形や様子」と漢字を比べながら見る、記号性に気づく」という「見る」レベルが見出せる。小学校3年生の「なかまのことばとかん字」では、「分類、類別、関係性」という前掲表5のV1、V2レベルが相当する。少なくとも、教師が「見ること」の系統性と漢字学習の系統性を関連させて捉えるという視点を持つことは、各学年の漢字学習を通して、子どもたちのどのように「見る」ことができるか、「見る」方略を使い、認識力を育成する漢字学習の側面が新たに見いだせると考えている。

勿論、現在の漢字学習にもこのような、全体と部分に分ける、部分と部分の関係捉える（へんとつくり等）、類別と分類といった、認識方略を用いて漢字の成り立ちや組み立て、熟語の構成を捉え直すという方法が取り入れられている。

しかし、十分に意識的にそういった方略が活用されているかという点、十分とはいえない現状もあるだろう。

漢字学習に「見る」の認識レベル、方略を意識して取り入れていく学習方法をより具体的に提案することができればと考える。

また、今後は、「見る」と「読む」のアナロジーについても、文献や実際の教材分析を通して明らかにしていく。

「見る」ことの意識化、意識して「見る」、何を「見る」のか、どのように「見る」とどんなことが分かるのか、それは、国語の学習、「話す」「聞く」「書く」「読む」とどのように関係し、役立つのか、教科書分析を継続して、実践的提案を行っていきたい。

<注>

- 1) 藤森裕治 (2003) 「国語科教育における映像メディアの教育内容—メディア・リテラシーの視点から—」国語科教育、53、pp.18-25。藤森裕治 (2004) 「第四の言語活動『みること』—批判力を育てるメディア・リテラシーの行方—」月刊国語教育研究、383、pp.2-3。浜本純逸 (2004) 「国語教育・国語科教育」田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典 (第3版)』教育出版、pp.256-257。奥泉 (岩本) 香 (2004) 「メディア教育を支える「見ること (Viewing)」領域の構造と系統性：西オーストラリア州の場合」千葉敬愛短期大学紀要、26、pp.65-96。
- 2) 石田喜美 (2011) 「国語科教育における「見ること」の学びに関する一考察：現代アートの鑑賞教育プログラムにおける学習者のテキスト生成過程の分析から」人文科教育研究、38、pp.37-48。
- 3) J.G.ヘルダー (1972) 『ヘルダー言語起源論』(木村直司訳)大修館書店。
- 4) 小田部胤久 (2015) 「われわれは一つの思考する／永続的な共通感覚器官である—ヘルダーの命題をめぐるカッシーラーとメルロ＝ポンティ—」美学藝術学術研究、33/34、pp.181-200。
- 5) 3) に同じ、pp.186-187。
- 6) 奥泉 (岩本) 香 (2004) 「メディア教育を支える「見ること (Viewing)」領域の構造と系統性：西オーストラリア州の場合」千葉敬愛短期大学紀要、26、pp.65-96。鹿内信善編著 (2010) 『看図作文指導要領—「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスン—』溪水社。
- 7) 坂東智子 (2014) 「教養教育における古典授業の開発 (1) —7枚の源氏絵で読む源氏物語—」『語文と教育』第28号、鳴門教育大学国語教育学会、pp.73-84。坂東智子 (2015) 「国語科教員養成課程で出会う『源氏物語』」(2) —「国宝・源氏物語絵巻柏木二」を読む—『教育学研究紀要』第60号、中国四国教育学会、pp.439-444。
- 8) 坂東智子 (2018) 「『見る』を含む学習の系統性 (1) —絵画や写真を見るときには—」全国大学国語教育学会大阪大会要旨集
- 9) 松村明監修・小学館大辞泉編集部 (2012) 『大辞泉【第二版】』下巻、小学館、p.3521。

- 10) 小学館国語辞典編集部（2003）『日本国語大辞典 第二版』第十二巻、小学館、pp.867-868。
- 11) 鹿内信善編著（2010）『看図作文指導要領―「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスン―』溪水社、p.3。
- 12) 11) に同じ、p.4。
- 13) 11) に同じ、p.6。
- 14) 2) に同じ、
- 15) 奥泉（岩本）香（2004）「国語科における『絵を読み解く力』の育成」
- 16) 15) に同じ。
- 17) 奥泉（岩本）香（2004）「メディア教育を支える「見ること（Viewing）」領域の構造と系統性：西オーストラリア州の場合」千葉敬愛短期大学紀要、26、pp.93-94。
- 18) 17) に同じ。
- 19) 17) に同じ。

【附記】

本稿は、平成29年度科学研究費補助金（基盤研究（B））（研究代表者：吉川幸男 課題番号17H02703）による研究成果の一部である。